

上演 8

2023年7月31日3校目

関東 ブロック (埼玉県)

埼玉県立秩父農工科学高等学校

「群白残党伝」

第47回全国高等学校総合文化祭演劇部門

第69回全国高等学校演劇大会

講評文

生徒講評委員会 担当委員

高知学芸高等学校 (高知県)

上野 朱璃

秩父事件の鎮圧からおよそ4年。秩父困民党の残党であるカヨは同じ志を持つ竹次郎らと共に大野苗吉との再会を果たす。彼らは自分たちの信じる正義の為、再び動き出そうとする。

舞台の中心に置かれた屋敷は非常にリアルで、予想外の隠し扉や奥行きのある舞台セットはまるで自分がその世界に入り込んでいるような感覚になった。場面転換の太鼓の音や禍々しい音楽は心臓に響き続け、霊が乗り移る瞬間の緑色の照明によって私たちはその世界観に引き込まれた。

困民党には困民党の世直しをしたい、国を自由にしたいという志があり、はたまた彼らを捕まえようとする警察や国にも国を守りたい、という志があった。非暴力の印である白色を掲げても人が撃たれてしまったりするように、誰も悪いことなど望んでいなくて、同じ「志」というものを追い求めてぶつかり合ってしまうのが余計に苦しく感じた。

登場人物たちにはそれぞれの人生があり、竹次郎は苦しい生活によってお父さんを亡くし、その他にもたくさんの人が犠牲になっているという描写があった。私たちは実際にあった出来事をただ「歴史」としかとらえておらず、その「歴史」を生きた人たちを一人の人間としてとらえられていないのではないかと、という意見があった。教科書では詳しく語られることは無くても、これまでたくさんの人たちが人生を一生懸命生きてきた。それを知らなかったという事に強く悔しさを感じた。歴史を無駄にしないためにも私たちは耳を傾ける必要があるのではないかと意識が変わった。

ラスト、生き残った己麻が乗り移った女子高生が『その後、どんな世の中になっていますか』と尋ねる場面がある。過去を生きた先人たちに誇れるような自分たちなのか、何も変わっていないのではないかと、自分自身の無力さに涙する委員も多くいた。

今平和に暮らしているということに奇跡さえ覚えてしまうような、それぞれの力強い意志が感じられる作品であった。

